

## 〈論文〉

# 交錯するディスクール／表象する隠喩 —アレホ・カルペンティエルと自己成型の問題—

柳 原 孝 敦 (法政大学)

1

アレホ・カルペンティエルAlejo Carpentier (1904-1980)の1962年の長編『光の世紀』*El siglo de las luces* 第四章最終節 (34節) は以下のように始まる。

... Hallábase frente a las Bocas del Dragón, en la noche inmensamente estrellada, allí donde el Gran Almirante de Fernando e Isabel viera el agua dulce trabada en pelea con el agua salada desde los días de la creación del Mundo. “La dulce empujaba a la otra porque no entrase, y la salada porque la otra no saliese”. Pero, hoy como ayer, los grandes troncos venidos de tierras dentro, arrancados por las crecientes de Agosto, golpeados por las peñas, tomaban los rumbos del mar, escapando al agua dulce para dispersarse sobre la inmensidad de la salada. Veíalos flotar Esteban, hacia Trinidad, Tobago o las Granadinas, dibujados en negro sobre estremecidas fosforescencias, como las largas, larguísimas barcas, que no hacía tantos siglos hubiesen salido por estos mismos rumbos, en busca de una Tierra Prometida<sup>1)</sup>. (289-290) (あまたの星の輝く夜、彼 [エステバン] はボカス・デル・ドラゴンの正面にいたのだ

が、そこはフェルナンドとイサベルの〈大提督〉が〈世界〉の創造の頃から淡水と海水が争い、絡み合っているのを見た、あの場所なのであった。「淡水は海水が入らぬよう押し止め、海水は淡水が出ていかないうよう押し止めて」いた。しかし、かつてと同じように今もまた、八月の増水によってなぎ倒されて内陸から運ばれた木々は岩にぶつかり、淡水から逃れ、海の方へと向かい、海水の広漠とした広がりの中に散って行く。エステバンはそれらがトリニダード島やトバゴ島、グラナディナス群島の方へ流れて行くのを眺めていたが、揺らめく燐光の上に黒く描き出されたその木々は、あたかも、それ程遠い昔ではない頃、〈約束の地〉を求めて同じ方向に出帆した、長い、とてつもなく長い船のようであった)

幼くしてサンティアゴ・デ・クーバのおじの商家に引き取られて育った主人公エステバンは、おじの死後いとこのカルロス、ソフィアとともに暮らしていた。そこへ現れ商売の手ほどきをしてくれたり、喘息に苦しむエステバンに医者を紹介するなどして信望を集めたのがフリーメイソンのフランス商人ヴィクトル・ユグであった。このヴィクトルとともに革命下のパリに渡ったエステバンは、自ら望んで革命に参加し、仏領アンティル諸島の全権特使に就任したヴィクトルに同伴し、翻訳官、書記として活動していた。しかし、徐々に孤独を深め、独裁者然としてくるヴィクトルに愛想を尽かした彼は暇を請い、ギアナのカイエンヌで最後の仕事を終え、故郷サンティアゴへの帰途につく。上に引用した34節は、カイエンヌを出た船が、ボカス・デル・ドラゴンと呼ばれるベネズエラのパリア半島とトリニダードの間の海峡にさしかかった際の記述である。ここでは物語の展開上重要な事件が起こる訳ではない。船上のエステバンは流れ行く木の幹を眺めている。ただそれだけのことである。ただそれだけのことであるが、その海の様子や流れ行く木々がある種のイメージを喚起し、カイエンヌからサンティアゴまでの比較的長い旅程のただの一通過点に過ぎないこのボカス・デル・ドラゴン近辺の記述を厚く長いものにしていく。

まず、この地が「フェルナンドとイサベルの〈大提督〉が〈世界〉の創造の頃から淡水と海水が争い、絡み合っているのを見た」場所とされているが、「フェルナンドとイサベルの〈大提督〉」とは、言うまでもなく、クリストバル・コロン（コロンブス）その人のことなのだから、それに続く引用符に括られた部分がコロンの言辞からの引用であろうことは想像に難くない。実際、合計四回に渡ってインディアス（アメリカ大陸）への航海を企てたコロンは、三回目にはパリア地方、ボカス・デル・ドラゴンに達している。その際にフェルナンドとイサベルのいわゆるカトリック両王に宛てた報告書簡には以下のような一節が見られるのである。

そこで私はあの流れのすじと海水の盛り上がりは、あれほど激しい轟音を立てて、この河口から出ては入っていたものなのであり、それは淡水と海水の争いであったのだと判断いたしました。淡水は海水が入らぬよう押し止め、海水は淡水が流れ出ていかないよう押し止めていたのであります。La dulce empujaba a la otra por que no entrase y la salada por que la otra no saliese<sup>2)</sup>。

このように、『光の世紀』中の引用符内の一文は、コロンの書簡からほぼ一字一句違えずに引いてきたものであることが確認できる<sup>3)</sup>。カルペンティエルとコロンと言えば、まず最初に思い浮かべられるのは、遺作となった『ハーブと影』*El arpa y la sombra* (1979) だろう。これはそれ自体がコロンと彼に関わった人々の様々なテキストからの引用によって成り立った作品である。しかし、そもそもこの小説はコロンその人と彼の列福裁判をテーマとしているのだから、それはむしろ当然である。我々が『光の世紀』におけるコロンからの引用を問題にするのは、一見ストーリー展開とは無縁に、主人公がコロンゆかりの地を通過するというだけで彼のテキストが想起されているという事実が、意義深いことのように思われるからである。コロンからの引用が冒頭に挙げた部分のみで終わっているのならば、それは単なる文学的彩色のための引用として見過ごされたのかも知れないが、この部分は冒頭の引用の数ページ先、この節の半ばにも繰り返されるので

ある。

Hallábase Esteban en las Bocas del Dragón, en el alba aún estrellada, allí donde el Gran Almirante viera el agua dulce trabada en lucha con el agua salada desde los días de la Creación del Mundo. “La dulce empujaba a la otra porque no entrare, y la salada porque la otra no saliese.” (293-4) (いまだ星の輝く暁に、エステバンはボカス・デル・ドラゴンにいた。そこは〈大提督〉が〈世界〉の〈創造〉の頃から淡水と海水が争い絡み合っているのを見た、あの場所なのであった。「淡水は海水が入らぬよう押し止め、海水は淡水が出て行かないよう押し止めていたのであります」)

更にこの二回目の引用の直後、少なくとももう二カ所、コロンの書簡の他の部分からの引用が見られる。いちいち対照して示すことはしないが、ボカス・デル・ドラゴンの淡水の流れに気づいたコロンの、水が“cada vez más dulce y más sabrosa” (294) (一層甘く、うまくなってゆく) という観察や、“Yo no hallo ni jamás he hallado escritura de latinos ni de griegos que certificadamente diga el sitio, en este mundo, del Paraíso Terrenal, ni lo he visto en ningún mapamundi”. (ibid.) (私は〈地上の楽園〉のこの世での位置を明確に述べたラテン人やギリシャ人の文献を知らないし、これまで見たこともありません。またどんな地図の上にもそれを見出したことはありません) との考察などがそうであることが確認できる。加えて、引用ではないが、「フェルナンドとイサベルの〈大提督〉」の名がボカス・デル・ドラゴンに結びつけられ、更に二度ほど喚起されることを指摘するならば、これをもって我々は次のように言うことができよう。『光の世紀』第四章34節はコロン (のテキスト) を取り込むことによって成り立っていると。この取り込みがここでの我々の考察の対象となる。

## 2

『光の世紀』第四章34節はコロンのテキストを取り込むことによって成

り立っている。しかし、その取り込みの形はまだ十分に分析されたわけではない。取り込みとは、上に見たようなレベルに留まるものではないのだ。カルペンティエルはコロンのテキストのある特性までも取り出し、利用し、それに委ねるかのように自身のテキストを紡いでいるのである。まずその様を見て行こう。

淡水と海水の絡み合いを描写したコロンの書簡からの引用を、上で我々は二つ示した。ここではいずれの場でも引用文にあるフレーズが先行していることに留意しなければならない。つまりコロンの眺める淡水の流れが「〈世界〉の創造（〈創造〉）の頃から」と修飾した一節である。「創造」creaciónの文字が小文字から大文字に変わっているのは誤値と考えるのが妥当であろうが<sup>4)</sup>、それにしても、例えば新大陸の地質学的古さを表現していると解するには大袈裟に過ぎるようなこのフレーズは一見理解に戸惑われるのだが、コロンの引用に決まって先行するということは、これもまたコロンの言辭への示唆であるに違いない。そして実際にコロンが「〈世界〉の〈創造〉」即ち創世記に言及している事実思い至るならば、この一節が、コロンがボカス・デル・ドラゴンの先にあることが予想される大陸と旧約聖書「創世記」中のエデンの園とを同一視し、「といたしますのも私は、そこが〈地上の樂園〉と考えるからであります。ですからそこへは神の御意志をもってでなければ何人も辿り着けないのであります<sup>5)</sup>」と述べたことに対応していることがわかる。

海岸線から百キロメートルにも達しようという海峡地帯においてなお淡水の流れが確認できる巨大なデルタを有する大河は、とりもなおさず大陸の存在を証明するものなのだが、自身が到着した土地がアジア（即ちインディアス）だと信じていたコロンにとってそこに大陸が存在してはならず、そのような矛盾を隠蔽すべく彼は、複数の淡水の流れを手がかりに、一本の川が流れ、それがやがて四本に分かれるという聖書の記述を想起し、そこを〈地上の樂園〉であり、「何人も辿り着けない」と断定し、それ以上の探索を放棄する口実としたのであった<sup>6)</sup>。この断定は、確かに、自説の矛盾

を隠蔽し、その誤謬を露呈させないための言い繕いだっただろう。だがここに、コロンのテキストに存する二つの相異なるディスクールの押し合い交錯する様が観察されることも間違いない。淡水の流れやうねりを観察する確かな航海者のそれと、ヨーロッパ中世の神学的教義に従って世界を解釈しようとするものである<sup>7)</sup>。航海者のディスクールが当然そこから帰結さるべき結論（この先には巨大な大陸が存在する）へと到達しないよう、神学的ディスクール（「神の御意志をもってでなければ何人も辿り着けない」つまり大陸は確認できない、あるいは人のための大陸は存在しない）が押し止めていのだ。淡水と海水の争いを記述したコロンは、そこが地上の楽園であるという結論に達するのに、我々の引用したアンソアテギの注釈になるテキストで言えば、5ページ強の紙幅を割いて低回している。まず彼は出帆以降の航路を振り返り、その先々での星の位置や気候を詳しく述べ、現在の位置を確認する（航海者のディスクール）。そこにプトレマイオスらの名を忍ばせながら地球の形状に関する省察が紛れ込み（航海者のディスクール／神学的ディスクール）、その後ようやく聖書の記述に到達し、聖イシドル、ドゥンス・スコトゥスといった中世的・神学的権威に言及しながら、地上の楽園はなしのへたのような形をしているという自説を開陳し、彼がいるその地こそが楽園の入り口なのだ<sup>8)</sup>と結論するのである（神学的ディスクール）。

引用の源泉としてのコロンのテキストが二つの相異なるディスクールの押し合い絡み合う緊張感を湛えたものであるならば、そこからの引用によって成り立っているカルペンティエルのテキストにも同様の緊張関係が生まれない筈はない。既に示した部分をもう一度確認してみれば、カルペンティエルがコロンの保持する二つのディスクールをともに引用し、併存させ、ぶつけ合っていることは明かだろう。この絡み合いが動因となって小説のテキストは動いているのだ。提督の保持する神学的ディスクールが、ここでは地上の楽園、即ちエデンの園への言及を巡っていることに今は注意すべきである。コロンのこの書簡との直接の関係は持たないにしても、

彼のアメリカ到達の出来事はその後のヨーロッパ世界でのユートピア思想の隆盛をもたらすこととなるのだが<sup>8)</sup>、カルペンティエルの筆致は、エデンの園への言及に引きずられ、あたかもそのような歴史的経過をなぞるかのよう、もはや神学的というよりはユートピアのディスクールとでも呼ぶべきものへとずれて行くのである。

既に冒頭の引用部分には、淡水に流されてきた木々が「〈約束の地〉を求めて同じ方角に出帆」した船に見立てられる一文が現れている。この後小説では、その船に乗った民が〈約束の地〉を求めてアンティル諸島を島伝いに北上していったというエピソードが展開される。〈約束の地〉という名前が、それだけでユートピア的なものであることは言うまでもないが、その地が引用文の数行先で、一旦〈北の帝国〉 Imperio del Norte (更に先の方でこれがマヤ帝国であるとされるのだが) と言い換えられた後、〈待ち望まれた土地〉 Tierra-en-Espera という名を纏い、 “La espera, sin embargo, se prolongaba.” (291) (しかしながら、期待は引き延ばされていった) と、その地を目指す人々の期待ばかりが膨らみ、旅は一向にはかどらないことが述べられるに至って、ユートピアのイメージは決定的となる。オリノコ河の内陸部から発してアンティル諸島を島伝いに北上していったとされるその民とは、もちろん、いわゆるカリブ族のことだが、だとすれば彼らはやがてコロンの艦隊に出会うのであり、彼らの〈約束の地〉、〈待ち望まれた土地〉を求めての旅は挫折するのである。そういった経緯も描きつつ、カルペンティエルのテクストにおけるユートピアのディスクールは、何処にもない場所、叶えられない希望の地としての側面が強調され、この節の後半、やはり叶えられぬ希望を抱いてしまったエステバンの回顧に接続される。

Y a un Mundo Mejor había marchado Esteban, no hacía tanto tiempo, encandilado por la gran Columna de Fuego que parecía alzarse en el Oriente. Y regresaba ahora de lo inalcanzado con un cansancio enorme, que vanamente buscaba alivio en la remembran-

za de alguna peripecia amable.(296) (ある〈より良き世界〉を目指してエステバンは進んだのであった。それはそんなに遠い昔のことはなかったが、その時彼は、〈東方〉に立ち昇るかに見えた〈火柱〉に幻惑されていたのだ。それが今や到達し得なかった場からの帰還の途上にある彼は深い疲労を伴っており、何事か優しい出来事の思い出の中にその疲れを癒す術を探ってはみるのだが、徒労に帰っていた)

エステバンが目指した〈より良き世界〉とはフランス革命である。より正確に言えば、フランス革命が目指した筈の自由、平等、友愛の精神に立脚した理想的な共和制市民社会である。けれどもそのような理想的な社会は実現され得べくもなく、到達し得ないところlo inalcanzadoなのである。共和制は周知のジャコバン恐怖政治からテルミドールのクー・デタを招き終焉を迎えるだろうし、アンティル諸島では廃止された筈の奴隷売買がやがて復活し、エステバンは深い失望を覚えることになる。カリブ族の挫折した移動を記述するユートピアのディスクールは、こうした挫折感を抱えたエステバンの境遇へと重なって行く。ユートピアとはやはり何処にもない場所であった。この失望はエステバンに、例えばこの節の最後、久しぶりの彼の帰還を出迎えたソフィアに向かって、開口一番、“Vengo de vivir entre los bárbaros”(297) (野蛮人達の間で生きてきたよ) という科白を吐かせるのだろうし、次の章では革命批判をさせるだろう。それだけでなくエステバンは自身の革命への参加を冥府下降にたとえさえもする。ユートピアのディスクールはいつしか反転し、理想郷の対抗概念たるディストピアに転換するのだ。

風景描写に始まった筈のものが主人公の心境に重なって行くのならば、ユートピアのディスクールの流れはこの小説のこの場における完成度を保証していよう。またそれが反転をはらみつつ以後の小説の展開の中での革命—小説のテーマ—の位置づけに大きく作用するのならば、この第34節とそれを構成しているユートピア／ディストピアのディスクールの小説の中での重要性が理解されよう。しかし、完成度や重要性というのはここでわ

ざわざ論じるまでもなく当然のことであり、だからこそ我々はこの場を分析の対象としているのである。その作業にあつていまひとつ留意しておかなければならないのは、緊張をはらんだコロンのテキストからの引用によって、しかもそこからずれる形で発したこのユートピア／ディストピアのディスクールが、それが発した源である神学的ディスクールと交錯しながら流れて行くということである。

コロンの地上の楽園の記述と流れ行く木という小説の道具立てからのイメージの連鎖によって、小説ではカリブ族の移動の物語が呼び寄せられた。それが〈約束の地〉=マヤ帝国を目指しての移動であったと語られることによってユートピアのディスクールは発動する。このエピソードはカリブ族の起源譚やら伝承、記録などをもとにしている。彼らがマヤを目指していたという点に関しては、作者自身、1948年に書いたエッセイの中で、「そう断定する人も幾人かいる」としてこのエピソードを紹介している<sup>9)</sup>。小説に挿入されたこのエピソードをある特定のテキストの引用と考えると、この「幾人か」というのが誰なのか特定しなければならなくなり、それは現時点で我々の手の余る作業なのだが、とりあえずはカルペンティエルがこのエピソードのもととなる記録をいくつか見聞して、それらをもとに組み立て、小説に挿入したのだと言うことは確認しておこう。コロンの保持していた神学的ディスクールから別の（諸）テキストが連鎖的に引き出されていたのである。こうして一旦コロンの遊離した小説のテキストは、再びコロンのテキスト、あるいはコロンが保持していた神学的ディスクールと交わる。再びディスクールが絡み合うのである。それはもちろん、コロンとカリブ族との出会いの場として描かれる。

最終目的地たるマヤ帝国はもう一つ二つの島を残した向こうに控えているだろうと、即ち自分たちの理想郷探索の旅はすぐに終わりを迎えるだろうとカリブの民が考えていた時、彼らはよそからの侵入者に行く手を阻まれる。周知の如く、カリブ族（とコロンが考えていた人々）は彼がその日記や書簡に記したように、ヨーロッパ人と戦闘を交えその血を流した最初

のアメリカ原住民である。それは1493年1月13日のことであった。おそらくはこの戦闘かと思われるカリブ族とヨーロッパ人との戦いを小説は、旅の行く手を阻まれた前者の后者への襲撃として描いている。その戦闘に対して以下のようなコメントが述べられるに及んで我々は、再び(コロンの)神学的ディスクールが現れ、ユートピア／ディストピアのディスクールを押し戻そうとしている様を確認するのである。

Dos tiempos históricos, inconciliables, se afrontaban en esa lucha sin tregua posible, que oponía el Hombre de los Tótems al Hombre de la Teología. Porque, súbitamente, el Archipiélago en litigio se había vuelto un Archipiélago Teológico. Las islas mudaban de identidad integrándose en el Auto Sacramental del Gran Teatro del Mundo. La primera isla conocida por el invasor venido de un continente inconcebible para el ente de acá había recibido el nombre de Cristo, al quedar plantada una primera cruz, hecha de ramas, en su orilla. Con la segunda habíase remontado a la Madre, al llamarla Santa María de la Concepción. (292-3) (〈トーテムの人間〉が〈神学の人間〉に対立する、休戦協定などあり得ないこの戦闘において、二つの相容れない歴史的時間が対峙していた。というのも、戦いのさなかにあるこの群島はやにわに〈神学の群島〉へと姿を変えていたからである。島々はその身分を変え、〈聖餐神秘劇世界大劇場〉に統合されていたのだ。こちらの人間が認識することもできない大陸からやってきた侵入者に見つかった最初の島は、その岸辺に木の枝で作った最初の十字架が立てられるに当たって、キリストの名を授かっていたのであった。二つ目の島で、侵入者は〈母親〉まで遡行していた。そこを〈受胎の聖母マリア〉と名付けたのだ)

コロンは最初に到達した西インド諸島のグワナハニ島をSan Salvador(救済者、つまりイエス・キリスト)と名付け、次に渡った島をSanta María de la Concepciónと名付けている訳だが、これらの島、この引用の直後に

列挙される、宗教的名称を持つに至った島々（その最たるものがトリニダード＝三位一体である）、同様に宗教的な名の町々をもってカルペンティエルはそこが〈神学の群島〉に姿を変えたと言っているのだ。このような言葉遊びは作家の真骨頂であるが、それはともかく、いずれにしろこの場で、コロンの名付けた島々の名が、宗教的・神学的色彩のもとに統一され、列挙されていることは明らかだろう。ユートピア／ディストピアのディスクールの行く手に神学的ディスクールが立ちはだかり、対峙しているのである。

二つのディスクールが交錯するこの場で、少なくともひとつの興味深い隠喩が産み出されていることも見逃してはならない。ディスクールの絡み合いの産物といえるその隠喩とは、もちろん、〈聖餐神秘劇世界大劇場〉である。これがカルデロンの聖餐神秘劇『世界大劇場』*El gran teatro del mundo* (1649)のタイトルを引用したものであることは明白である。元来バロック期に流行した世界をひとつの劇場と見なす思考法であるが、カルペンティエルはことのほかこの見方を好んでおり、劇場の語は小説でも隠喩としてたびたび用いられる。オリノコ河を遡行する主人公の眼前に展開される場面を「密林の大劇場」*el gran teatro de la selva*と呼んだのは『失われた足跡』*Los pasos perdidos* (1953)においてであったし、この『光の世紀』でも、エステバンが革命下のパリを歩く場面で、そこが劇場のようだったと表現される。世界は劇場であるという思考法に頼るならば、〈トーテムの人間〉と〈神学の人間〉が相見える場となった〈神学の群島〉が宗教劇の劇場であるのは当然と言え言い得る。そういえばこの場を構成する一方の〈神学の人間〉は、その名も『世界大劇場』という典型的な宗教劇を生み出した国の者達であった。とすればこの〈聖餐神秘劇世界大劇場〉という隠喩は極めて必然的に採用されたということになる。

だが、我々がこの隠喩を「興味深い」と称したのは、ここにある種の違和感が生ずるように思えるからである。この隠喩がもはやコロンのテキストにもカリブ族の伝承にも属さないことは言うまでもない。新たなテクス

トが、あるいは新たな文脈が挿入されたのである。挿入された新たな文脈は、ヨーロッパ／アメリカというごく単純な二元論に立脚するならば、アメリカとの関係を取り結ばない、徹頭徹尾ヨーロッパ的なものなのだ。アメリカの出現が如何にルネサンス＝バロック期ヨーロッパの世界観に強い影響を与えていようと、そして『世界大劇場』が如何にその時代の世界観を典型的に表象している・代表的なアレゴリー劇であれ、そこにアメリカは関わってこない。それに何より、コロンとカリブ族の戦闘を記述していた筈のこの場であったが、引用の源泉であるカルデロンの劇はそれより百五十年以上も後に書かれたものである。違和感とは、このような時間的・空間的飛躍に由来するに違いない。そしてこの飛躍は、その直後、下に示すように、同様の飛躍の上に成り立つもう一つの隠喩を連鎖的に導き出す。

Dando un salto de milenios, pasaba este Mar Mediterráneo a hacerse heredero del otro Mediterráneo, recibiendo, con el trigo y el latín, el Vino y la Vulgata, la Imposición de los Signos Cristianos. (293) (数千年の時を飛び越え、この地中海は、小麦やラテン語とともに〈ワイン〉と〈ラテン語訳聖書〉、〈キリスト教の表徴の強制〉を受け入れることにより、もう一つの地中海の後継者となっていったのである)

そもその最初からそれが飛躍saltoであることを告白してしまっているこの文章でカルペンティエルは、カリブ海を地中海に見立てている。これをただ形状の類似にのみ基づいた隠喩だと捉えると、それこそ飛躍が過ぎ、強引の観を免れまい。地中海はカリブ海より遙かに閉じた海なのだから。こういった強引さを補完するかのように、この「地中海」(カリブ海)が小麦、ワイン、ラテン語、キリスト教といったものを受け入れることによってもう一つの(つまり本物の)地中海世界の後継者となったと言っている。つまりここに描かれているのは、コロンとカリブ族の出会いという、それ自体歴史的なひとつの出来事では最早なく、この出来事が持つに至った歴史なのである。「数千年の時を飛び越え＝飛躍し」てしまったのだ。つまり

カリブ海＝アメリカ世界の、地中海＝キリスト教＝ヨーロッパ世界への組み込み、後者による前者の征服の過程と、その結果としてできた文化的連続性が、ここに凝縮され描かれようとしているのだ。征服の歴史的過程や文化的連続性によって代補された強引な形状の類似。「地中海」の隠喩はそのようなものとして成立している。換言すれば、「地中海」という隠喩はカリブ海＝アメリカ世界の全体を、空間的、時間的に表象しようとする意図の内包されたひとつの記号なのである。

## 3

我々は『光の世紀』第四章34節においてコロンのテキストが小説のテキストを紡ぐための重要な素材として巧みに取り込まれ、かつそれが、ある表象への意図を備えた記号としての隠喩を産み出す装置となっていることを確認した。『光の世紀』は歴史小説である。歴史小説であるならばそれがふんだんに史料を引用することによって成り立つのは当然であろう。例えば同じ作家のハイチ黒人革命を扱った『この世の王国』*El reino de este mundo* (1949) は、その源泉である筈の史料との綿密な突き合わせの作業を行ったエンマ＝スサナ・スペラッティ＝ピニエロをして、「『この世の王国』は、空想的ではあるが、優れてブッキッシュなlibrescoものである<sup>10)</sup>」と感嘆せしめたのであった。

しかし『光の世紀』第四章34節は、既に述べたように、小説自体のストーリー展開には直接関与しない、純然たるフィクション部分であり、史料上の制約からは完全に自由な筈の場である。同時にまたこの節は、小説に革命＝ユートピア／ディストピアのイメージを導入する部分としてテーマの上では重要な箇所である。純然たるフィクションでありテーマ上重要である、そういう場においてコロンが引用され、それをもとにテキストが紡がれて行くというその事実は、引用という技法とその技法の質がカルペンティエルの創作理念やらイデオロギーやらに深く関わってくるということを示していないか。もちろんそれが史料に基づかなければならない歴史小

説であろうが、「純然たるフィクション」と思われるようなものであろうが、そもそも文学作品はそれ自体で成り立つものではなく、ひとつのテキストは先行するある(諸)テキストの上に成り立つものである。しかし我々がここで問題にしているのは、現在では半ば当然の前提とされているだろうそのようなテキスト論などではない。そうではなくて、引用の技法なのである。引用であるからには、そこにはある種の意図の介在が前提される。そのような見地に立ったとき、『光の世紀』第四章34節の引用は分析すべき課題として立ち現れてくるのだ。

もちろん、歴史小説以外のカルペンティエル作品における引用が主題化されなかった訳ではない。『失われた足跡』*Los pasos perdidos* (1953) カテドラ社の校注版を編んだロベルト・ゴンサレス＝エチェバリアーは、特に主題にした訳ではもちろんないが、その綿密で網羅的な註によって、この小説が様々なテキストからの引用によって成立していることを示し得ていて参考になる<sup>11)</sup>。例えば主人公＝語り手の一行がカヌーでオリノコ河を遡る第三章終盤以降、印象的な密林の風景やそこで語られる黄金郷伝説がアレクサンダー・フォン・フンボルトをその源泉として持っていることをこの版は教えてくれる。

カルペンティエルが『失われた足跡』に引用したフンボルトのテキストに関しては、いわゆるポストコロニアル批評の文脈でメアリ・ルイーザ・プラットが祖上にのせ、歴史化していて興味深い<sup>12)</sup>。プラットがそこで問題にしていたのは、ヨーロッパのテキスト、主に旅行記が植民地との接触においてそこをどのように表象してきたか、そしてそれが自らのブルジョワ社会の形成過程と相まって、ヨーロッパの自己認識と植民地に対する認識を形成しながら、世界全体に対する(ヨーロッパ中心主義的)認識の形成過程に如何に深く関与していたかを示すことであった。地理学者ラ・コンダミンヌの南米探索旅行がもたらしたものが、リンネの自然体系に代表される、可視の自然をタブロー化し配列する十八世紀植物学的知の形態を強化したことを述べたプラットは、十九世紀への転換期に行われたフンボル

トの旅行とその旅行記が、アメリカ大陸の自然をアクセス可能な、分配・序列化されるべき（リンネ的）ものとしてではなく、不可視で、雄大で人智を超えたものとして再創造し、専門的、植物学的本ではなくむしろ非専門的な筆致で描いた旅行記で人口に膾炙し、よって以後のアメリカに対するヴィジョンの引用の源泉として、ヨーロッパでもアメリカでも参照されてきたと説く。そして独立期のイスパノアメリカ文学者や知識人—例えばアンドレス・ベリヨやシモン・ポリバル—もまた、フンボルトを参照し、引用し、書き直しながらアメリカについての意識、つまり自己認識を形成していったと続けるのである。

他者による表象を取り込み、身に纏い、自己とそれが含まれる世界とを作り上げて行くこと。ヨーロッパによるアメリカの表象を取り込んでそれをアメリカの姿として自己表現へと転換すること。プラットはこういったことをクリオーリョの自己成型 self-fashioning という語で説明している。表象による新たな表象の作成、あるいは表象の奪い合い。これが我々が引用とか取り込みと称してきたものに接続され得ることは言うまでもない。十九世紀知識人の主にフンボルトのテキストに基づきながらの自己成型について論じたプラットは、その締めくくりに、カルペンティエルの創作理念たる「現実の驚異的なもの」の中にもフンボルトのテキストが脈打っていることを指摘する。ヨーロッパ人を相手にアメリカの「驚異的現実」を説明しようとする際の作家のスタンスはフンボルトのものであると。そして『失われた足跡』の次の一節がフンボルトの書き直しであると断定するのだ。

Al pasar cerca de las orillas, las penumbras logradas por varias techumbres vegetales arrojaban vaharadas de frescor hasta las curiaras. Bastaba detenerse unos segundos para que este alivio se transformara en un intolerable hervor de insectos. En todas partes parecía haber flores; pero los colores de las flores eran mentidos, casi siempre, por la vida de hojas en distinto grado de madurez o

decrepitud. Parecía haber frutos; pero la redondez, la madurez de las frutas, eran mentidas por bulbos sudorosos, terciopelos hediondos, vulvas de plantas insectívoras que eran como pensamientos rociados de almíbar, cactáceas moteadas que alzaban, a un palmo de la tierra, un tulipán de esperma azafranada. Y cuando aparecía una orquídea, allá muy alto, más arriba del bambusal, más arriba de los yopos, se hacía algo tan irreal, tan inalcanzable, como el más vertiginoso edelweiss alpestre<sup>13)</sup>. (岸边を進むと植物の屋根が作る薄暗がり船まで冷気を投げ掛けてきた。しかし二、三秒もそこに留まっていると、この安らぎも昆虫達のもたらす耐え難い熱気に変わってしまうのだった。あらゆるところに花があるように見えたが、花の色をしたものは、殆ど常に、成熟やら老化の度合いの異なる種々の葉が目を欺いていたのだった。果実もなっているかに見えた。しかし丸く熟した果実のようなものは、汗をかけた球根、異臭を放つ繊毛、密のふりかかったパンジーのような食虫植物の陰門、地面から一パルモの高さにサフラン色の精液をチューリップ状に吹き上げる斑点のあるサボテン科植物であった。そしてあの遙かな高み、竹の茂みやヨーポの遙か上に一輪の蘭科植物が姿を現したとき、それはアルプスのめくるめく高みにあるエーデルワイスほどに非現実的で手に届かないもののように思われたのだった)

プラットは、この部分がフンボルトの『自然のタブロー』*Ansichten der Natur* (1808)の「ディストピア的書き直し」であり、フンボルトの叙述と「場所自体も変わってはいない」と述べる。「しかし価値ある記号の多くが裏返っているのだ」と<sup>14)</sup>。

フンボルトの『自然のタブロー』は彼が唯一ドイツ語で出版した書物で、30巻に及ぶ博物学的著作には収めきれなかった自然の描写を含み、プラットによれば、最も読まれ、参照されたもののひとつである<sup>15)</sup>。そこにはオリノコ河本・支流への旅の叙述も収められている<sup>16)</sup>。例えばアプーレ川からオ

リノコへと向かう最中の記述には、いかにも、川岸に沿って長く続く植物でできた壁、植物の屋根、植物の壁に扉のように開いた穴など、プラットが指摘した場に限らず、『失われた足跡』中のオリノコ河遡行の場面（第三、四章）に印象的に描かれる道具立てが多く見られ、カルペンティエルがフンボルトを参照・引用していることはわかる<sup>17)</sup>。フンボルトはそこに様々な動植物の種目をかき連ね（十八世紀的、タブロー化する植物学的ディスクール）た上で、「ここは楽園のようだ」という水先案内人のインディオの言葉を紹介し、遠くから聞こえる正体の知れない動物の鳴き声に睡眠を妨害されたエピソード（不可視で未知の自然というフンボルト的ディスクール）を続け、「すべてはそこが運動する器官の力に満ちた世界であることを告げている。[中略]あたかも人間の慈悲深くも感受性に富む魂に向けて自然が発した何千もの声のひとつのようなものだ」（雄大な自然）と結ぶ<sup>18)</sup>。一方、それに対してカルペンティエルは、この引用文の直前で“*La selva era el mundo de la mentira, de la trampa y del falso semblante; . . .*”<sup>19)</sup>（密林は嘘と罠、虚偽の相貌の世界であり [略]）と述べ、この引用文で見たように、植物の「虚偽の相貌」、花と思われたのは花ではなく、果実とおぼしきものは球根などの虚偽の相貌であると描写するのだ。タブロー化されたものと未知で不可視のものが並ぶ雄大な自然ではなく、タブロー化された筈のもの（食虫植物、サボテン科植物等）さえが嘘をつく自然である。「ジャケツイバラとブラジルスオウ木、ヒメギンネムの巨大な幹が形作る、突っ切って通ることなどできないように思える壁の前面には、砂の川岸にサウソ [*Hermesia castaneifolia*] によく似た灌木の柵ができており<sup>20)</sup>」というように、既にタブロー化された植物が不変に留まるフンボルトの描写とは、それはいかにも違っている。その上不快な昆虫や「悪臭を放つ」植物に囲まれているのであれば、そこは到底「楽園のようだ」とは言えない<sup>21)</sup>。この場面がフンボルトの「ディストピア的書き直し」だというのはそういうことである。記号の価値が「裏返って」いるのだ。

## 4

裏返ししの引用としての自己成型。プラットが『失われた足跡』の自然描写に読みとったのは、そういうことであった。それは前世紀独立期から連続と続くイSPANアメリカのクリオーリョ知識人がとり続けた態度と同種のものとして歴史化された。だが、果たしてそうだろうか。

少なくともフンボルトという素材に限って言うなら、プラットの主張はとりあえず首肯できよう。例えば既に1928年、ペドロ・エンリケス＝ウレーニャは、その名も『我々の表現探求の六つの試論』*Seis ensayos en busca de nuestra expresión*という本で、十九世紀イSPANアメリカ文学が表現を獲得して行く過程を評して、「アレクサンダー・フォン・フンボルトとシャトーブリアンの助けを得て、とうとう我々は自然を直に眺めることができるようになった<sup>22)</sup>」と述べている。つまりイSPANアメリカ知識人がフンボルトを（ついでながらシャトーブリアンを）参照しながら自己をとりまく世界についての表象を獲得してきたことを指摘している訳である。それをクリオーリョ的自己成型と呼ぶか「自然を直に眺めることができるようになった」と述べるかは大きなスタンスの差を示しており、エンリケス＝ウレーニャの断定はプラットの説に対する有力な証拠として機能しうるものではあるが。十九世紀知識人がエンリケス＝ウレーニャやプラットの指摘したような状態であるならば、二十世紀においても事態は同様であったように見える<sup>23)</sup>。そしてもちろん、カルペンティエルも。実際に作家は、『失われた足跡』に想を与えたオリノコ河への旅を振り返り、自身で描写した風景と以前に読んで知っていたフンボルトの描写を比較し「[ホセ・]グミーリャやフンボルトが描いた事柄の多くは、まったくその様相を変えてはいなかったのだということに気づいた<sup>24)</sup>」と回顧している。このとき作家自身が見落としていたことは、彼は旅行の前に既にフンボルトを読んでいたのであれば、その筆致が既にフンボルトのテキストの上に成り立っていた筈だということだろう。風景は変わっていたかも知れないが、それを描写するディスクールが既にフンボルトのそのの侵入を受けていたということ

だ。自己成型がまず表象のやりとりの次元に現れるものならば、カルペンティエルがフンボルトを読んでからオリノコ河へ出かけてそこを描写し、彼を思いだした時点でそれは大部分成立していた筈である。

なるほどプラットの主張を我々はとりあえず受け入れるべきだろう。そしてフンボルトが小説のテキストに取り込まれるに際して「ディストピア的書き直し」となり、記号の価値が「裏返って」いることも上に確認したとおりだ。しかし、だからこそ、そのディストピア性や裏返しを指摘した彼女が、にもかかわらず、そこにそれ以上の注意を払うことなく、「フンボルトのアメリカニスト的エクリチュールの受容の構造は1820年以来変わっていないということか。1820年の時点でフンボルト作品の本質主義的側面に訴え掛ける魅力<sup>ア</sup>を付与していた権威<sup>ビ</sup>やらハイアラーキー、疎外、従属、ヨーロッパ中心思想といった関係性は、いまだ不可視なまでに深く浸透しているということか<sup>ル</sup>」と結論を急ぐのは、たとえカルペンティエルに関する論述がプラットの論全体ではエピローグの位置づけしか与えられていないにしても、納得しがたい。少なくともカルペンティエルの作品群には必ずしも無批判な反復には留まらないフンボルトからの引用もある。例えばハバナの町の建築物を賞賛し美しく描写した「柱廊の都市」La ciudad de las columnasはまさにフンボルトの引用に始まるが、そこでカルペンティエルは、美しいけれども道路整備などの都市化が遅れているとしたフンボルトの指摘を逆手に取り、それが熱帯という気候の要請によるものだとし、無計画さの中にあるバロックな美を描出し得たのだ<sup>26)</sup>。美しさに対する賞賛を受け入れつつも近代的都市計画というフンボルトのヨーロッパ(中心主義)的ヴィジョンを転換し、ネガティブな要素(都市化の遅れ)をポジティブなものにしようとする意図がここで顕在化しているのである。裏返しとはこのような価値の転換ではないか。

裏返しの取り込みによるヨーロッパ中心思想の価値転換。フンボルトの取り込みを見ながら引き出したこのような推論を、『光の世紀』に立ち返って確認すべきだろう。実はこの長編においてヨーロッパ中心思想の価値転

換の意図が最も顕在化するるのである。それはどのようにしてか。我々は上で、コロンとカリブ族の戦闘のシーンが小説中に描かれ、そこにコロンの神学的ディスクールが顕現してくる様を見た。実際の戦闘シーンは以下のように描かれている。

Los invasores se topaban con otros invasores, insospechados, insospechables, venidos de no se sabía dónde, que llegaba a punto para aniquilar un sueño de siglos. La Gran Migración ya no tendría objeto: el Imperio del Norte pasaría a manos de los Inesperados. En su despecho, su ira visceral, los Caribes se lanzaban al asalto de esas enormes naves, asombrando con su audacia a quienes las defendían. Se trepaban a las bordes, atacando con una encarnizada desesperación, inexplicable para los recién llegados.(292) (侵入者は他の侵入者達に出くわした。予測しなかった、予測することのできなかったこの侵入者達は、何処とも知れぬ所から、彼らの数世紀に渡る夢を打ち砕こうと到着したのだ。〈民族大移動〉はもはや目標を持たないだろう。〈北の帝国〉は〈予期せざる者達〉の手に渡らるだろうから。失望のうちに、腹の底からの怒りに、カリブ族はそれら巨大な船の襲撃に打って出て、その勇敢さによって船を守る者達を驚かせたのであった。舷側に攀じ登り攻撃を仕掛ける彼らの、絶望した者の持つ残忍さは、今し方到着したばかりの者達には説明のつかないものだったのだ)

我々は先にこの戦闘を、コロンの記録した1493年1月13日のものではないかと予測した。しかしその戦闘は、陸地で行われたこと、スペイン人達が傷つけると敵はあっけなく逃げ出したことなどの点でここに描かれた戦いとは違うものであることがわかる<sup>27)</sup>。コロンはカリブ族を勇猛果敢な戦士として描きはしなかった。

ではどの戦いか、と問うことは、今は無意味である。コロンのテキストを下敷きにできたこの場面で、コロンに導かれ、やがてコロンの神学的デ

ィスクールに行く手を阻まれる形で挿入されたこのカリブ族のエピソードであれば、この戦闘もコロンの描いた戦闘であると予想されるのは理の当然であろう<sup>28)</sup>。ところがその予想が裏切られ、コロンのテキストは何処にもなく、その特定を上で放棄した、幾つかの(幾つもの)テキストに基づく筈の、カリブ族の伝承、伝説のみがここにテキストとして息づいているのだということが今は重要なのである。作家が一旦取り込み、そこに自身のテキストを委ねたかに見えたコロンのテキストが、巧妙にすり替えられ、放擲されているのだ。テキストがすり替えられ、コロンの描いたような弱く、情けないカリブ族が勇猛なカリブ族へと転換される。価値が裏返っているのである。

更に重要なのは、『光の世紀』第四章34節を構成する諸ディスクールが交錯し絡み合い、争った産物とされた二つの隠喩である。〈聖餐神秘劇世界大劇場〉と「地中海」という、あれら二つの隠喩にもう一度目を転じてみれば、そこにも裏返し、価値の転換が用意されていることがわかるだろう。コロンの神学的ディスクールに導かれ、「アメリカとの関係を取り結ばない、徹頭徹尾ヨーロッパ的な」世界観の表出たるアレゴリー劇の表題が用いられた〈世界大劇場〉の隠喩は、やはりヨーロッパの地名を用い、征服とその結果の文化的連続性の表象への意図によって代補された「地中海」の隠喩を連鎖的に引き出した。このような隠喩は、その記号の性質故に、とりあえずヨーロッパ中心思想とヨーロッパ中心史観に貫かれているようにも見える。しかしテキストの最終的な産物たる「地中海」の隠喩にあって、カリブ海が「この地中海」este Mar Mediterráneoと称され、本家本元の地中海は「もう一つの地中海」otro Mediterráneoの位置に貶められていることに気づかないわけにはいくまい。「もう一つの」という形容詞は統語論上の要請に従う正当なものではあろう。しかしこの形容詞は、それが修飾する名詞にいかにも副次的、贗作的な観を付与しはしまいか。なによりカルペンティエルにおける裏返しの取り込みとしての自己成型を見てきた我々にとって、この転倒は見逃すことのできない、重要なものに思われ

る。ここでヨーロッパ中心思想（史観）が転倒され、はぐらかされているのだ。

カリブ海を地中海に重ね合わせる見方はここにある隠喩としてだけ表明されるのではない。例えば第六章42節ではもうひとりの主人公ソフィアが、ブリッジタウンにあるビザンチン帝国最後の王の墓を訪れ、そこにある種の予兆めいたものを感じる場面が描かれる。その場面をカリブ海と地中海の重ね合わせの場として重要視しながら、この小説をヨーロッパ的史観とカリブ的史観の交錯、対象のうちに新たな歴史の語り方を模索する実験であると論じたのはロベルト・ゴンサレス＝エチェバリーアであった<sup>29)</sup>。我々は彼と共に、カルペンティエルが自覚的に行ったこのような試みを重く見よう。ヨーロッパのテキストを裏返しに取り込むことによって価値を転倒させる作家の手法も、一種の歴史観や世界観構築の新たな試みであったのだと見よう。たとえ取り込む素材を十九世紀知識人と分かち合っていたのだとしても、あるいはそれだからこそ、その素材を裏返し、価値を転倒させようとする意志にカルペンティエルの独自性はある。プラットの言うようにラ・コンダミンヌやフンボルトがアメリカを表象したことがヨーロッパ中心的世界観の構築に与したのならば、それらのテキストを裏返して書き直すことは新たな世界観の構築へと向けられるべき筈の行為だ。

自己成型とは表象のやりとり・奪い合いの問題であった。そして表象representaciónとは代表＝代理行為である点において支配／従属関係を生み出す<sup>30)</sup>。だとすればフンボルトやコロンをただ模倣するのではなく反転させつつ取り込むという行為は、同時に主権回復への試みでもあるのだろう。我々はコロンが刻印し、その後ヨーロッパ世界によって産み出されたユートピアのディスクールが、『光の世紀』においていつしかディストピアのそれへの反転をはらむことをも見た。ディストピアとは、プラットが『失われた足跡』に指摘したあのディストピアに接続されるべきであろう。ヨーロッパの旅行者がアメリカを楽園・ユートピアのように描くとき、例えばプラットにも部分的に依拠しながら林みどりが読みとったように、無時間化さ

れ博物館化される対照としてのアメリカを、権威関係、支配／従属関係に基づく帝国主義的地図の中に付置しているのだとすれば<sup>31)</sup>、ユートピアをディストピアへと転換することは時間を取り戻し、博物館の陳列棚から抜けだそうとする試みなのではないか。

## 註

- 1) Alejo Carpentier, *El siglo de las luces, Obras Completas de Alejo Carpentier*, Tomo5 (México, Siglo XXI, 1986 [2ªed.]).以後引用は末尾にページ数のみを示す。
- 2) Cristóbal Colón, *Los cuatro viajes del Almirante y su testamento*, Ed. y pról. de Ignacio B. Anzoátegui (México, Espasa-Calpe Mexicana, 1989 [12ªed.]), p.179.下線引用者。
- 3) 綴り字や表記が改められているといった問題は別にして、この部分は版によって多少の異同が認められる。例えばConsuelo Varelaによる, Colón, *Textos y documentos completos (Nuevas Cartas: ed. de Juan Gil)* (Madrid, Alianza, 1992 [2ªed.]), p.375によれば, "la dulce empujaba a la otra porque no entrase, y la salada porque ésta otra no saliese". (下線引用者)となる。しかしもちろん、定冠詞が指示代名詞に変わった程度の差異は、ここでは無に等しい。ちなみに、この引用に関しては、杉浦勉、「訳者あとがき」、同訳、『光の世紀』（書肆風の薔薇 [水声社], 1990) 345ページにも指摘がある。また、杉浦氏の翻訳は引用に際して参考にしたが、基本的に本論の引用は拙訳。
- 4) テクストにいささかの異同のあるSeix Barral版(Barcelona, 1981 [2ªed.]) p.248は、冒頭部分も大文字である。Ambrosio Fornetによる校注版(Madrid, Cátedra, 1982)p.313も同様。
- 5) Colón, *Los cuatro viajes...*, p.184.
- 6) このようなコロンの意図に関しては、Edmundo O'Gorman, *La invención de América: Investigación acerca de la estructura histórica del Nuevo Mundo y del sentido de su devenir* (1958) (México, FCE [Serie Lecturas

Mexicanas] , 1984) が分析している。

- 7) 例えばツヴェンタン・トドロフが、コロンのテキストに見られる、航海中に観察した様々な記号を神学的に解釈しようとする傾向を分析し、コロンを解釈学者herméneuteと読んだのは周知のことである。Todorov, *La conquête de l'Amérique: La question de l'autre* (Paris, Seuil, 1982) pp.22-39.しかし、ここではそのような統合的な見方よりも、この時点で二つのディスコースがせめぎ合っていたのだと考えた方が面白いように思われる。ピーター・ヒューム、『征服の修辞学：ヨーロッパとカリブ海先住民1492-1797』岩尾，正木，本橋訳，(法政大学出版局，1995)第一章は、コロンの第一回の航海日誌を「オリエントの言説」と「ヘロドトスの野蛮の言説」との混在と見て、カリブ＝カニバル＝食人の語の起源に興味深い光を当てている。
- 8) 「今日ではよく知られていることだが、まさにアメリカの発見がルネサンス期のヨーロッパにユートピア文学の隆盛をもたらした」Alfonso Reyes, *No hay tal lugar, Obras Completas de Alfonso Reyes*, Tomo XI (México, FCE, 1960), p.364.また、拙論「アルフォンソ・レイエスのアメリカ論」『ラテンアメリカ研究年報』No.14 (日本ラテンアメリカ学会，1994)，132-6ページでも言及した。
- 9) Carpentier, "Visión de América. El último buscador de El Dorado", *Crónicas I: arte, literatura, política, Obras Completas*, Tomo8(1985), pp. 191-200. esp.p.193.
- 10) Emma Susana Speratti-Piñero, *Pasos hallados en El reino de este mundo* (México, El Colegio de México, 1981), p. 1.
- 11) Alejo Carpentier, *Los pasos perdidos*, Ed. de Roberto González Echevarría (Madrid, Cátedra, 1985).
- 12) Mary Louise Pratt, *Imperial Eyes: Travel Writing and Transculturation* (London& New York, Routledge, 1992) esp. chap. 8. また、プラットの駆使する概念装置を借用したり批判したりしながら、十九世紀アルゼンチンに関する表象を分析した林みどり「歴史叙述と〈法外なもの〉の在り処：一九

世紀アルゼンチン思想における自己領有の問題」、『思想』第八五号(岩波書店, 1995年5月) 45-65ページ; 同, 「グランジ: コロニアル・ディスコース再読」, 『現代思想』Vol.24-1 (青土社, 1996年1月) 28-50ページを参照のこと。

- 13) Alejo Carpentier, *Los pasos perdidos, Obras Completas*, Tomo2 (1987 [4<sup>a</sup>ed.]), p.297.
- 14) Pratt, *op. cit.*, p.196.
- 15) *Ibid.*, p.119.
- 16) "De la vida nocturna de los animales en los bosques del Nuevo Mundo", Alejandro de Humboldt, *Cartas americanas*, comp., pról., notas y cronología de Charles Minguet, trad. de Marta Traba (Caracas, Bibl. Ayacucho, 1989 [2<sup>a</sup>ed.]), pp.222-225として再現されたものは、その最も典型的な一節である。また、オリノコアマゾン地帯への旅については *Relation historique du Voyage aux régions équinoxiales du Nouveau Continent* (1814-25)にも詳しく、これを中心にまとめられた Alexandre de Humboldt, *L'Amérique espagnole en 1800: Récit d'un savant allemand*, Présenté par Jean Tulard (Paris, Calmann Levy, 1990)や、その英訳 Alexander von Humboldt, *Personal Narrative of a Journey to the Equinoctial Regions of the New Continent*, Abridged and Trans., Introduction by Jason Wilson, Historical Introduction by Malcolm Nicolson (New York, Penguin [Penguin Classics], 1995)などが参考になる。
- 17) Roberto González Echevarría, *Alejo Carpentier: The Pilgrim at Home* (1977) (Austin, Univ. of Texas Press, 1990), pp.175-6 f.n.33.には、この部分に José Gumilla, *El Orinoco ilustrado* (1745)が活用されているとする Silva Cáceresの説が紹介されている。
- 18) Humboldt, "De la vida nocturna. . .", pp.223, 225.
- 19) Carpentier, *op. cit.*, *loc. cit.*
- 20) Humboldt, *op. cit.*, p.222.

- 21) ちなみにフンボルトは「楽園のようだ」との水先案内人の言葉を受けて、  
 「しかしアメリカの動物達の楽園に黄金時代の静けさは今はなく」(ibid., p. 223)と続けてはいる。しかし、他の版では「実際、すべての人々が無垢と幸福のうちに暮らしていたことを伝える古い伝承のような、原初の状態をここは我々に思い出させてくれる」(*L'Amérique espagnol. . .*, p.62; *Personal Narrative. . .*, pp.178-9)として部分的に認めているのである。そもそもフンボルト自身が「楽園のようだ」という意見に賛成していたかどうかは大した問題ではあるまい。彼がそのような説も紹介しつつアメリカを描くことによってどのようなイメージが形成されたか、彼の紹介した「楽園のようだ」という説がどのような効果を持ち得たかが問題なのだ。
- 22) Pedro Henríquez-Ureña, *Seis ensayos en busca de nuestra expresión, Obra Crítica* (Mexico, FCE, 1960), p.246. ちなみに、ここで挙げられているもうひとりの素材、シャトーブリアンに関してもカルペンティエルは興味深い題材を提供している。本論で扱っている『光の世紀』にはシャトーブリアンのテキストも取り込まれているのである。このことはいずれ論ずるつもりではある。
- 23) ちなみに、フンボルトに限らずヨーロッパの産み出した諸テキストを自覚的に取り込み、アメリカの表象を構築しようとした作品群の中で、少なくとも二〇世紀における金字塔的作品のひとつにアルフォンソ・レイェスの『アナワク眺望』*Visión de Anáhuac* (1917)がある。このことは前掲拙論にも指摘した。
- 24) Alejo Carpentier, "Un camino de medio siglo", *Razón de ser, Obras Completas*, Tomo13(1990), p.160.
- 25) Pratt, *op. cit.*, p.197.
- 26) Alejo Carpentier, "La ciudad de las columnas", *Tientos y diferencias* (1964), *Obras Completas*, Tomo13, pp.61-73.
- 27) Colón, *op. cit.*, p.128ss.
- 28) ラス・カサスがたびたび指摘しているように、コロンの戦った相手はカリ

ブ族ではない。にもかかわらず San Salvador島や Sant María de la Concepción島の命名者=コロンとカリブ族が争ったとして小説が描かれるということは、これがコロンの思いこみ、あるいはテキストの範囲内に留まっているということであり、故に他のテキストにこの場の源泉を求めるのは無意味である。この場はコロンのテキストに依拠しつつそれをすり替えているのである。

29) Roberto González Echevarría, "Socrates Among the Weeds: Blacks and History in Carpentier's *El siglo de las luces*", *Celestina's Brood: Continuities of the Baroque in Spanish and Latin American Literatures* (Durham & London, Duke U.P., 1993), pp.170-193.

30) そのようなものとして産み出された表象が文化的ヘゲモニーによって持続性と権力を付与されたディスクールとなり、表象されるものは表象するもの=代行者に取り込まれる。このことをオリエントを巡るディスクールに関して分析したのが Edward W. Said, *Orientalism* (New York, Penguin Books, 1978)であることは言うまでもなく、サイドの圧倒的インパクトの下にあるアメリカ合衆国の批評理論の問題圏内にあるプラットも、もちろんそのような意識に基づいており、だからこそフンボルトのテキストが権威やら従属関係、ヨーロッパ中心思想に貫かれていることを分析し得た。

31) 林みどり「グランジ」、前掲、29-30ページ。